

# タ・プローム寺院の出入口に表された浮彫 に関する調査報告

日本学術振興会特別研究員 PD  
久保真紀子

## はじめに

本稿は、2016年8月7日～27日に実施したタ・プロームの出入口構成部材に表された浮彫に関する調査報告である。タ・プロームの寺院伽藍は多くの施設から構成されており、出入口の総数は約400カ所にのぼる。今回、3週間にわたる調査期間の中で、そのすべての出入口の現地調査を完了した。現在はその資料整理の途中であり、出入口に浮彫された図像表現の主題が寺院伽藍において構成する配置傾向や、その配置から類推される尊像配置によって表現された世界観に関して、現時点で詳細な考察結果を提示するには至っていない。したがって、本稿では、調査の目的や方法を示すとともに、伽藍内で確認された浮彫のうち主題が特定できたいくつかの代表的な作例を紹介し、調査で気付いた点をいくつか指摘することにしたい。今回の調査資料を丁寧に分析した上で、後日改めて詳細な考察結果を報告する予定である。

## 1. タ・プロームの概要

タ・プロームは、ジャヤヴァルマン7世の治世初期に建立された仏教寺院である。1882年にタ・プロームの寺域から発見された石柱碑文 (K.273)<sup>1)</sup> の第36～37偈 (A面第71～72節、B面第1～2節) には、西暦1186年 (釈迦暦1108年)、王がこの寺院に本尊としてジャヤヴァルマン7世の母親を表した般若波羅蜜多菩薩像を安置したことと、2名の宗教的指導者の彫像とその左右に260の神々の像を安置したことが記されている。

タ・プローム石柱碑文 (K.273)<sup>2)</sup>

### 第36偈

prātiṣṭhapac chrījayarājacūddā-  
maṇiṃ maṇidyotitapuṇyadehāml  
tasyāñ jananyā jinarāṭṛmūrttiṃ  
mūrttiṃ samūrttidyuśāsānkarūpaiḥll

Il a érigé Śrījayarājacūdāmaṇi dont le corps est brillant de gemmes, et en celle-ci l'image qu'il érigeait était celle de sa mère qui est l'image de la mère du Jina, en Formes – Ciel – Lune – Forme.

1) 4面のうちA、B、C面にはそれぞれ72行、D面には74行、全145節のサンスクリット語碑文が刻まれている (Cœdès 1906)。

2) 翻字と仏語訳はセデスによる (Cœdès 1906: 75)。日本語訳は筆者がセデスの仏語訳をもとに訳した。

彼は1108年<sup>3)</sup> (西暦1186年) に、宝石で体中を輝かせたジャヤラージャチューダーマニをそこに安置した。それは彼の母親の像であり、ジナの母親<sup>4)</sup> の像であった。

### 第37偈

so tiṣṭhipac chrījayamaṅgalār[tha]-  
devaṃ tathā śrījayakīrtidevaml  
mūrttiṃ guror dakṣiṇavāma — . yaṣ  
ṣaṣṭiṃ śate dvau parivāradevānll

Il a érigé Śrījayamaṅgalārthadeva, et aussi Śrījayakīrtideva, l'image de son guru ... à droite et à gauche un entourage de 260 divinités.

彼は自身の宗教的指導者であるジャヤマンガラールタデーヴァとジャヤキールティデーヴァの像と、その左右に260の従属的な神々の像を安置した。

20世紀前半、フランス極東学院はアンコール遺跡群の保存修復活動を精力的に進めたが、このタ・プロームに対しては最小限の補強を行うにとどめていた。それ以降も長年の間、この遺跡では本格的な修復は実施されなかったが、近年、インド考古調査局 (Archaeological Survey of India) とカンボジア政府アプサラ機構との共同プロジェクトによって、部分的に修復が行われた (2003~2015年)。また、1992年にアンコール遺跡群が世界遺産に登録されてからは、大木が建物に絡みつ়く光景が情趣を感じさせる遺跡として多くの外国人観光客が訪れるようになり、連日賑わいを見せている。

タ・プロームは東西約1,020m、南北約670mと広大な敷地を持ち、伽藍中央部は、6重にめぐらされた周壁、それらの間に築かれた2重の環濠に囲まれている (図1)。中央主祠堂の周りには2つの回廊と周壁が取り巻き、それぞれ東西2面あるいは東西南北四面に塔門が配されている。東側には十字回廊があり、南側と北側には中央祠堂と回廊からなる副次的伽藍が配されている。そして、第3周壁の東側と西側には、小規模な祠堂が立ち並んでいる。第3周壁東塔門と第5周壁東塔門の間には、「踊り子の間」と呼ばれる列柱広間がある。

## 2. 目的

本調査は、次の2つの目的のもとに実施した。1つ目は、出入口構成部材に施された浮彫 (図2) や出入口枠に刻まれた碑文 (図3) といった諸資料をもとにタ・プローム創建時の尊像配置を示すことである。2つ目は、出入口装飾の様式的特徴および各施設に残る増改築の痕跡を手掛かりに、寺院建造過程を示すことによって、この寺院における尊像配置の変遷過程を提示することである。そして、タ・プロームで得られた結果を、同時期に建造されたプレア・カンの尊像配

3) シヴァの8つの姿 (=8)、空 (=0)、月 (=1)、姿 (=1) で1108年を表す (Cœdès 1906: 75)。

4) 「ジナの母親」とは仏陀の母親を意味し、般若波羅蜜多菩薩のことを指す (Cœdès 1906: 45)。

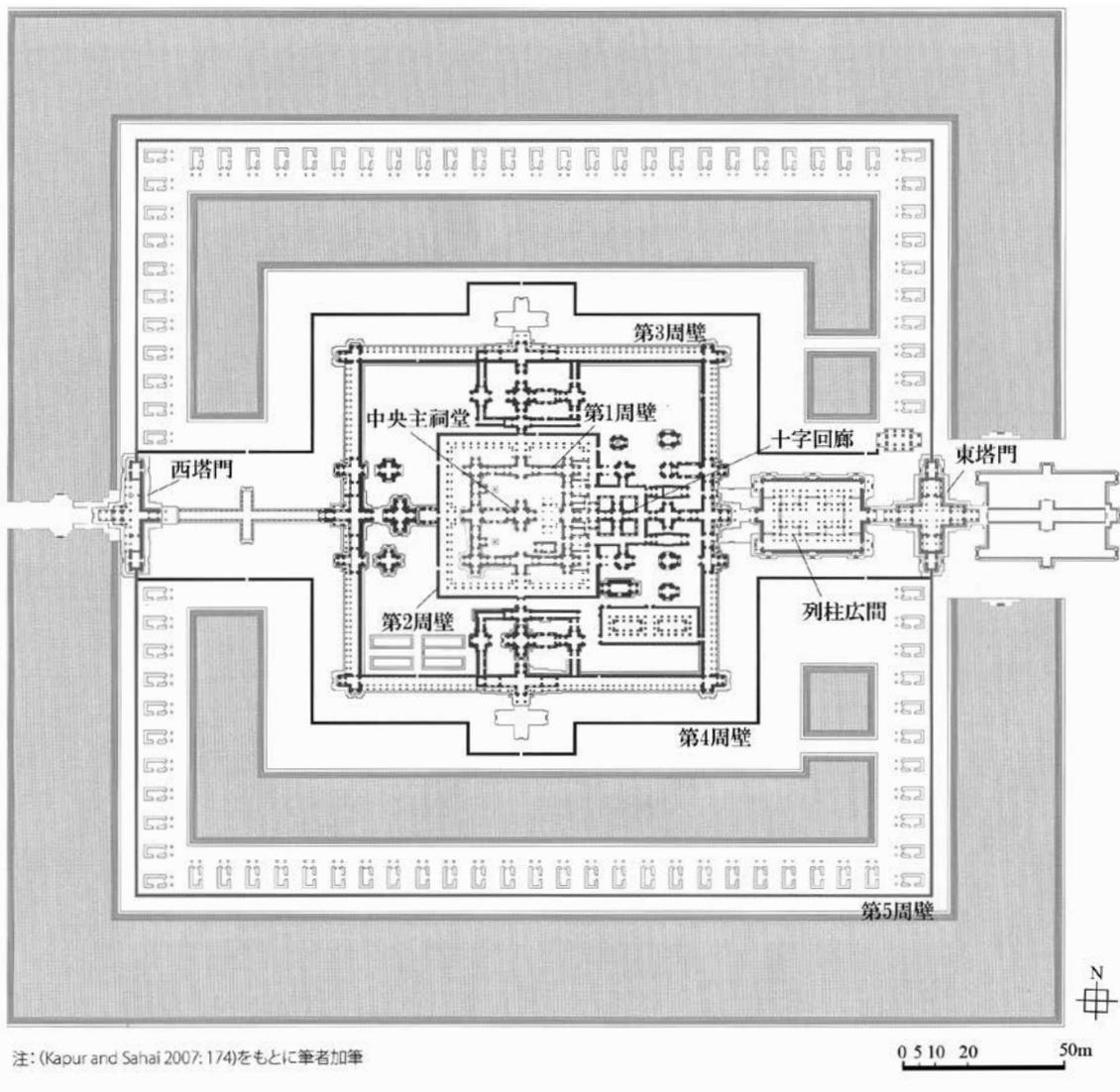


図1 タ・プローム伽藍中央部

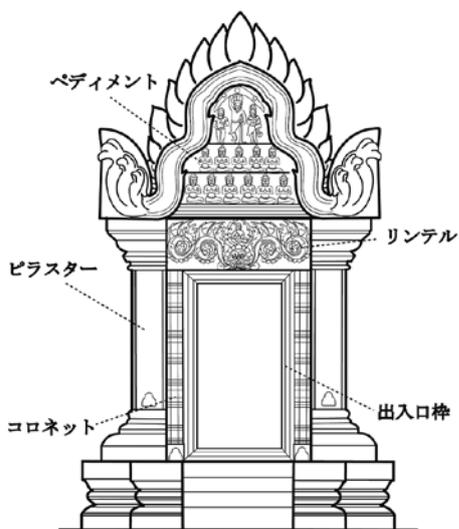


図2 出入口概略図



図3 出入口枠に刻まれた碑文  
(第3周壁西塔門主室東面出入口)

置に関する筆者によるこれまでの研究成果<sup>5)</sup>と比較し、両寺院にみられる共通点や相違点の考察を通して、ジャヤヴァルマン7世統治期の図像表現の特徴や王の寺院建造意図を読み解くことを目指す。

### 3. 調査方法

#### (1) 2つの視点からの調査

上述の目的のもと、本調査は、図像研究と様式研究という2つの視点から、タ・プロームの尊像配置を調査した。図像研究については、出入口装飾や壁面浮彫を写真撮影し、それぞれ図像的特徴を記録する。その後、他寺院の類例との比較、ならびに先行研究で提示された説の再検討を通して、浮彫に表現された図像の主題を特定する。すべての図像の特定が終わったら、寺院伽藍全体における図像の配置構成をダイアグラムに表し、その配置構成が、タ・プローム石柱碑文に記された2つの寺院伽藍の尊像配置と整合するかどうかを検証する。

様式研究については、遺跡調査時に出入口装飾の各構成部材（ペディメント、リントル、ピラスター、コロネット、出入口枠）の写真撮影を行い、文様の種類や形式を観察し、インベントリー用紙に記録した。それを調査後、あらかじめ準備した凡例集（装飾の形式や文様のヴァリエーションを一覧にした凡例集）に基づき、各部材に施された彫刻の様式的特徴をコード化して、分類する。そして、施設の各所に残る増改築の痕跡等を手掛かりに寺院建造過程を類推し、そこに施された装飾の時期区分を行う。このような方法で、タ・プロームの寺院建築に施された浮彫装飾の様式変遷を提示する。

#### (2) 現地調査

調査の方法は以下のとおりである。まず、出入口構成部材に施された浮彫（崩落して出入口付近に置かれているものも含む）、および出入口周辺の壁面に施された渦巻文様の写真撮影と図像的特徴ならびに所在場所を図面に記録した。同時に、彫刻の図像的特徴や主題を記録した。また、各出入口において、出入口枠の高さや幅、構成部材の寸法の計測等を行った。出入口枠に刻まれた古クメール語の短い碑文については、先行研究の記述内容を参考に、それぞれ所在場所を確認し、撮影した。最後に、各施設の残存状況（屋根の崩落箇所、樹木が伸びている場所、石材崩落箇所、および進入不可の箇所）を確認し、図面に記録した。

#### (3) 調査メンバー

- ① 久保真紀子（日本学術振興会特別研究員 PD）
- ② プン・ダラー（アプサラ機構職員〈Department of Conservation of the Monuments inside Angkor Park, APSARA National Authority, Cambodia〉）

---

5) 久保 2012, 2014

## 4. 調査で気付いた点

### (1) 仏教図像

ペディメントやリントルに施された浮彫の大半は仏教図像であった。具体的には、禪定印仏坐像、観音菩薩立像、般若波羅蜜多菩薩立像、仏伝図、ジャータカ図等が確認できた（付図3～6）。図像の主題を特定するにあたっては、Christine Hawixbrokの研究や、Vittorio Rovedaの著書を参照した<sup>6)</sup>。

#### 禪定印仏坐像

第3周壁西塔門でみられたリントル（図4）中央には、蓮の上で禪定印を結び瞑想する仏坐像が表されている。仏坐像は頭部に冠帯と頂髻が表現され、その背後には葉文様で縁取られた葉状龕が表されている。仏坐像の顔は破壊されており、その顔貌をうかがうことはできない。仏坐像の下には花綱を吐き出すカーラが表され、その左右には2人の供養者が跪き合掌している。

顔が破損している点を除き、比較的残存状況の良好な図4のような作例がある一方で、禪定印仏坐像が削り取られてその下に表された台座だけ残っているものも多数みられた。第3周壁内北側副次的伽藍でみられたペディメント（図5）の削り取られた部分をよく観察すると、その上部に葉の生い茂る樹木、そしてその上に大きな傘が表されている。この樹木は仏陀がその下で瞑想したという菩提樹を表現しており、樹下の台座には、当初仏陀坐像が表されていた可能性が高いと考えられる。また、台座上にリングのような円筒形のものが表されているペディメントも散見された（図6）。この円筒は、周囲に



図4 禪定印仏坐像（第3周壁西塔門主室東面出入口）



図5 台座上が削り取られたペディメント（第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂北側前室北面出入口）



図6 台座上がリングに改変されたペディメント（第1周壁内南西敷地に張り出した小室東面出入口）

6) Hawixbrok 1989, 1994; Roveda 2005

浮彫を削り取った鑿跡が残っており、当初浮彫されていた禪定印仏坐像の頭部や手足を削り取って、胴体の部分を円筒形に改変したものと考えられる。

以上の、禪定印仏坐像がほぼ完全な状態で残存している箇所、後世に削り取られているが、その痕跡や周囲に残る菩提樹等によって、当初は禪定印仏坐像が表されていたと類推できる箇所、そして、禪定印仏坐像からリングに改変されたと判断できる箇所は、他にも多数の出入口で確認でき、付図3にその配置状況を示した。

### 観音菩薩立像

図7は、第3周壁内祠堂7のリンテル中央に表された観音菩薩立像で、4つの手に数珠や水瓶といった持物を執り、下半身には短い裙をまとっている。顔から頭髪部にかけて摩滅あるいは破損して不鮮明だが、結い上げられた頭髪の形状は確認できる。足元には、2体の供養者がひざまずき合掌している。観音菩薩立像は、他にも第2周壁内広間11、第3周壁内東側十字回廊と祠堂8、第5周壁内列柱広間、第6周壁内東側の「宿駅」と呼ばれる施設のペディメントやリンテルでも確認できる。この配置傾向から、観音菩薩立像は、中央主祠堂の周りを取り囲む第1周壁内の施設ではなく、比較的周縁部の施設に見られることが分かった（付図4）。



図7 観音菩薩立像（第3周壁内祠堂7北面出入口）

### 般若波羅蜜多菩薩立像

図8は、第5周壁内列柱広間、いわゆる「踊子の間」と呼ばれる施設でみられたペディメントだが、ペディメントの外縁と下端の水平帯状装飾で囲まれたティンパナムの彫刻面は2段に区切られ、その上段中央には下半身に裙をまとった女性立像が表されている。顔は破壊されているが、頭部には豪華な髪飾りが表現されている。両手の持物は破壊されているが、左手には蓮の花が一部残っており、この女性立像は両手に蓮の花を執る般若波羅蜜多菩薩立像である可能性が考えられる。周囲には踊子たちが舞い、女性供養者たちがひざまずき合掌している。下の段にも、合掌する女性供養者たちが表されている。

同様の特徴を持つ女性立像は、他に、第1周壁南塔門、経蔵、西側広間、第3周壁東塔門、第6周壁東塔門と南塔門のペディメントやリンテルの出入口でも認められた（付図3）。これらの配置傾向から、とくに中央主祠堂<sup>7)</sup>を取り巻く経蔵や塔門といった施設に女性立像が多く配されたことがうかがえる（図9）。これらの施設に多く見られるこの女性立像は、タ・プローム石柱碑文に記されたこの寺院の本尊、ジャヤヴァルマン7世の母親の姿を表した般若波羅蜜多菩薩

7) タ・プロームの中央主祠堂では、出入口構成部材を含め、壁面に施されたすべての浮彫が削り取られているため、寺院建造当初に表現されていた図像は確認できず、この祠堂内に祀られていた尊像について類推することは難しい。



図8 般若波羅蜜多菩薩立像（第5周壁内列柱広間北東隅祠堂東面ポーチ型出入口）



図9 女性立像脚部（第1周壁内西側広間北面出入口）

像を表象している可能性が考えられる<sup>8)</sup>。同じくジャヤヴァルマン7世統治期に建造されたプレア・カンの伽藍中央部では、出入口に観音菩薩像の浮彫がいくつも認められる。プレア・カンで発見された石柱碑文（K.908）は、この寺院の本尊が観音菩薩像であると同時に、ジャヤヴァルマン7世の父親の像でもあると記している<sup>9)</sup>。般若波羅蜜多菩薩を本尊とするタ・プロームの伽藍中央部の配置傾向は、プレア・カンの伽藍中央部の観音菩薩立像の配置傾向と類似しているように見受けられる。

### 仏伝図

仏教説話を主題とした図像も多数確認できた。そのうち、釈迦の生涯を物語るいわゆる「仏伝」と呼ばれる物語を主題とした浮彫の分布状況を付図5に示した。

第3周壁内南側副次的伽藍でみられた図10のペディメントは、釈迦が愛馬に乗って、生まれ育った王宮から抜け出す「出家踰城」の場面を表している<sup>10)</sup>。2段に区切られたティンパナムの上段には大きな馬にまたがる釈迦が表され、その周囲には、従者が釈迦のために傘を差し掛けながら駆ける姿が表されている。下段には、合掌する供養者たちが表されている。この場面を主題とする浮彫は、他に、第3周壁南東隅祠堂と第5周壁内列柱広間のペディメントでも確認できた。

図11のペディメントには、釈迦が髪を下して修行の道へと入る「剃髪」の場面が表されている<sup>11)</sup>。このペディメントは上端部の石材が崩落しているが、3段に区切られたティンパナムの上段中央には、片手で髪を掴み、もう一方の手に握った短剣で髪を切る釈迦の姿が認められる。中段と下段には、合掌する供養者たちが表されている。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内南側副次的伽藍のリンテルで確認できた。

第3周壁祠堂4でみられた図12のリンテルには、激しい修行の結果やせ細った釈迦に、村娘の

8) Roveda 2005: 262-263; Kapur and Sahai 2007: 51

9) プレア・カン石柱碑文（K.908）第34～35偈（A面第67～70節）（Coedès 1941: 274-275, 288; Maxwell 2007: 32-34）

10) Hawixbrock 1989: 19, 1994: 34; Roveda 2005: 230

11) Foucaux 1884: 197; Hawixbrock 1989: 19, 1994: 34; Roveda 2005: 230-233

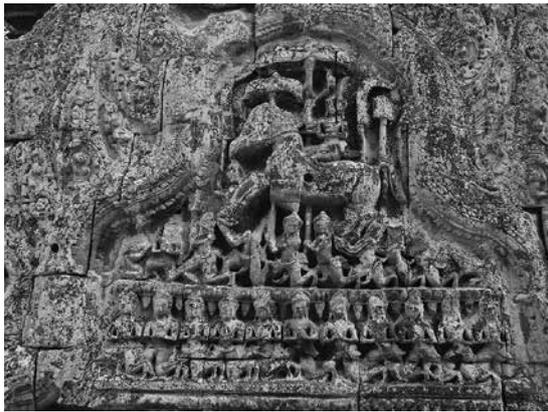


図10 出家踰城（第3周壁内南側副次的伽藍東塔門主室西面出入口）



図11 女性立像脚部（第3周壁内南側副次的伽藍北塔門東側通路南面出入口）



図12 乳粥供養（第3周壁内祠堂4南面出入口）



図13 降魔成道（第3周壁内南側副次的伽藍北塔門主室南面出入口）



図14 ムチリンダ竜王の護仏（第3周壁内南側副次的伽藍中央祠堂主室西面出入口）

スジャーターが乳粥を献上する「乳粥供養」の場面が浮彫されている<sup>12)</sup>。リントル中央のカーラの上に浮彫された2人のうち、向かって右側に跪いているのがスジャーター、彼女から差し出された乳粥を受け取っているのが釈迦と考えられる。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁南東隅祠堂に確認できた。

図13のリントルには、釈迦の瞑想を妨げるためにマーラが遣わした軍隊が大暴れするので、釈迦が大地に手を触れて大地の女神トーラニーを呼び出した場面が浮彫されている<sup>13)</sup>。トーラニーは、自分の髪を絞って水をあふれさせ、洪水を起こすことによって、マーラの軍隊を撃退した。マーラの誘惑に打ち勝った釈迦は悟りを啓き、仏陀（目覚めた者）となる。このリントルでは、トーラニーの頭上に表された龕の内側は削り取られているが、当初は釈迦の姿が表されていたと推察される。

12) Roveda 2005: 235

13) Hawixbrock 1994: 34; Roveda 2005: 235-238

この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁西塔門のペディメントとピラスター、第5周壁東塔門と西塔門のリンテルでも確認できた。

悟りを開いた後も樹下で瞑想を続ける仏陀であったが、そこににわかには暴風雨が吹き荒れた。図14のリンテル中央には、仏陀が瞑想していた樹下の土の中からムチリンダ竜王が現れ、その鎌首を広げて仏陀を風雨から守る「ムチリンダ竜王の護仏」と呼ばれる場面が表されている<sup>14)</sup>（いわゆる「ナーガ上の仏陀坐像」）。このリンテルでは仏陀像が削り取られているが、7つの頭を持つナーガの鎌首と3重に巻かれたとぐろが確認できる。とぐろの上には仏陀坐像の脚部や胴部の痕跡が残っている。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内南側副次的伽藍のピラスターや第5周壁西塔門のリンテルで確認できた。

### ジャータカ図

釈迦が前生で行った数々の善行を説いた「ジャータカ」を主題とした浮彫の分布状況を付図6に示した。

第3周壁祠堂3でみられたペディメント（図15）には、ヴェッサンタラ・ジャータカから、施与を至上の喜びと考えるヴェッサンタラ王子が、バラモンに依頼され2人の幼い子供たちを施す場面が表されている<sup>15)</sup>。2段に区切られたティンパナムの上段右側に坐すのがヴェッサンタラ王子で、向かい合って坐すバラモンの手に聖水をかけている。2人の手の下には2人の子供たちが立っていたと推察されるが、そのうち1人は破損している。下段右側には馬車が表され、御者のような人物もいる。荷台の上には傘が差し掛けられているが、傘の下に人物は確認できず、この馬車や荷台の傘が何を意味しているのかは不明である。このヴェッサンタラ王子がわが子をバラモンに施す場面の浮彫は、他に、第3周壁内東側十字回廊や第5周壁西塔門のリンテル、第5周壁東塔門内に置かれた崩落リンテルでも確認できた。

第5周壁東塔門でみられたペディメント（図16）には、シヴィ・ジャータカから、空腹の鷹に捕えられ食べられそうになっている鳩を救うために、自らの太腿の肉を切り取って鷹に与えるシヴィ王が表されている<sup>16)</sup>。3段に区切られたティンパナムの上段中央には、宮殿の中で身をよじらせるようにして短剣で太腿の肉を抉り取るシヴィ王の姿が表されている。中段には、家臣が天秤を使って、切り取られた肉の重さがハトの重さに至っているか計量しており、下段では合掌する供養者たちが表されている。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内祠堂7のペディメントでも確認できた。

第1周壁東塔門の南側に取り付く通路の出入口でみられたペディメント（図17）には、将来自分が王位を継承することのないよう、主人公テーミヤ王子が目と耳と口が不自由であるように装ったムーガバッカ・ジャータカの浮彫がみられる<sup>17)</sup>。このリンテルでは、テーミヤ王子に刺激を与えようと、父母が2人の剣士に命令し、王子の頭に剣を突きつけて驚かせようとする場面が表されている。向かい合って立つ2人の剣士は、剣を水平に持ち上げている。2人の間の浮彫は削

14) Roveda 2005: 239

15) ジャータカ第547話（中村 1988: 212-216）；Hawixbrock 1989: 19, 1994: 31-32; Roveda 2005: 255-256

16) ジャータカ第499話（Foucher 1955: 324-326）；Roveda 2005: 249

17) ジャータカ第538話（中村 1991:9-10）；Roveda 2005: 249



図15 ヴェッサンタラ・ジャータカ（第3周壁内祠堂3北面出入口）



図16 シヴィ・ジャータカ（第5周壁東塔門北側前室北面出入口）



図17 ムーガパッカ・ジャータカ（第1周壁東塔門南側通路西面出入口）



図18 ブーリダッタ・ジャータカ（第3周壁内祠堂7西面出入口）

り取られてしまっているが、当初はそこに瞑想するテーミヤ王子の姿が表されていたと推察される。このように剣を突き付けられても全く動じず、静かに瞑想を続けた王子は、後に出家して両親はじめ多くの人々の教えを説く人物となる。この場面を主題とする浮彫は、他に、第3周壁内南側副次的伽藍のペディメントとリントル、北側副次的伽藍のペディメント2点とリントル、第5周壁内列柱広間の出入口上に浮彫された疑似的なペディメント、第3周壁西塔門で確認できた。

第3周壁内祠堂7でみられたペディメント（図18）には、蛇の王国に生まれたブーリダッタ王子が、功德を積んで天上界に生まれ変わりたいと願い、あらゆる試練を耐え忍んで修行を積むブーリダッタ・ジャータカが表されている<sup>18)</sup>。2段に区切られたティンパナムの上段中央には台座があり、その上には当初ブーリダッタ王子が浮彫されていたと考えられるが、削り取られてしまっている。台座の左右には、このジャータカに登場するガルダ王とナーガ王が坐し合掌している。下段には、3つの蛇の頭を持つ女性たちが坐し、合掌している。この場面を主題とする浮彫は、他に第3周壁内祠堂3のリントルで確認できた。

18) ジャータカ第543話（中村 1991: 148-196）；Roveda 2005: 252

## (2) 渦巻文様内側の小さな浮彫

ピラスター柱身部の側面や、出入口周辺の壁面に浮彫された渦巻文様の内側には、禪定印仏坐像や供養者像、踊子像、仏伝図やジャータカ図、あるいは庶民の日常生活の光景等、ヴァリエーション豊かな浮彫が認められる。また、『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』といった叙事詩やヒンドゥー教の神々を思わせる図像もみられる。それら小さな浮彫の図像は、ペディメントやリントル等、出入口構成部材の浮彫と共通する図像が多いため、今回の調査対象に加えることにした。以下、いくつかの例を紹介する。

第3周壁内南側副次的伽藍でみられた図19の浮彫は、鷲鳥に乗るヴァルナと考えられる。本来、ヴァルナは西を守る方位神とされ、10世紀後半のバンテアイ・スレイ等では、ヴァルナは鷲鳥にまたがった姿で西側の出入口のペディメントやリントルに表される<sup>19)</sup>。一方、タ・ブROOMでは、ヴァルナ像は特定の方位に限定的に確認されるわけではなく、さまざまな施設の壁面に確認できた。鷲鳥に乗るヴァルナ像は他に、第3周壁東塔門や南側経蔵、祠堂1の壁面にも確認できた。

図20は、同じく第3周壁内南側副次的伽藍のピラスター側面に浮彫されたムーガパッカ・ジャータカで、図17と同様の場面を表している。このピラスター側面には、この浮彫が上端部に表されているものの、その下に連続する渦巻文様を見ると、『ラーマーヤナ』の場面(図21)や日常風景を表した浮彫がみられ、ピラスター全体として、必ずしも仏教図像で統一されているわけではないことが分かった。

図21には、たくましい体つきの2匹の猿が腕を組み合って争う姿が表されている。これは、『ラーマーヤナ』から、猿の王スグリーヴァが、因縁の間柄である兄ヴァーリンと争う場面を表した浮彫である<sup>20)</sup>。この争いの結果、スグリーヴァと同盟を結んでいたラーマによって、ヴァーリンは倒される。この場面を主題とする浮彫は、他に、第3周壁西塔門のピラスターや南側副次的伽藍の壁面浮彫でもみられた。

図22は第3周壁内北側副次的伽藍の壁面にみられた浮彫で、『マハーバーラタ』にも登場する



図19 鷲鳥に乗るヴァルナ(第3周壁内南側副次的伽藍西塔門主室東面出入口)



図20 ムーガパッカ・ジャータカ(第3周壁内南側副次的伽藍西塔門主室西面出入口)

19) Roveda 2005: 188-191

20) Book IV Kishkindhakanda.6 (Shastri 1976: 195-206); Roveda 2005: 126-130



図21 『ラーマヤナ』ヴァーリンとスグリーヴァの争い（第3周壁内南側副次的伽藍西塔門主室西面出入口）



図22 ケーシンと戦うクリシュナ（第3周壁内北側副次的伽藍中央祠堂北西壁面）

英雄クリシュナが、馬の姿をした魔物のケーシンと戦う場面を表している<sup>21)</sup>。将来、クリシュナに殺害されるという予言におびえたカンサ王は、クリシュナを殺すために次々と魔物を差し向けたが、反対にどの魔物もクリシュナによって退治されてしまった。最終的にはカンサ王自身も、クリシュナによって殺害されることとなる。この場面を主題とする浮彫は、他に第1周壁南塔門のリンテルにもみられた。

### （3）主題未特定の図像

これまで紹介してきたように、タ・プロームで確認できた多くの浮彫については、そこに表現された主題が特定できたか、もしくは類推できたが、中には特定するのが難しい図像もあった。ここでは特定の難しい2つの図像に焦点を当て、その図像的特徴と現時点での筆者の見解を示す。

#### 台座上に坐す男女と、その下で馬と戦う男性

第3周壁内東側十字回廊のペディメントには、彫刻面の中央上部に男女が台座上に坐し、その下に馬と戦う男性を表した浮彫がみられた（図23）。ジャヤヴァルマン7世統治期の寺院もしくはそれ以前の寺院でみられる浮彫で、これと類似した図像を調べた結果、上部の男女は、カイラーサ山を揺り動かすラーヴァナにおびえるシヴァとウマー（図24）、あるいはランカー島の闘いに勝利し、故郷のアヨーディヤーに凱旋するラーマとシーター（図25）との類似性が見られた。とくに、このタ・プロームのペディメントでは男性が弓を持っていることから、ラーマである可能性が高いと考えられよう。その下に表された馬と戦う男は、先述のクリシュナが馬の姿をした魔物ケーシンと戦う様子を表した浮彫（図22、26）と酷似しており、この図像との関連性がうかがえる。これら2つの図像は、ともにヒンドゥー教に関する図像であるが、それぞれ異なる神話や叙事詩を主題とした図像である。これまでの研究では、この浮彫において、それら異なる主題が組み合わされている理由や、そもそも全く別の主題を表した図像である可能性を詳細に検討し

21) Bhāgavata-purāṇa 10.37 (Tagare 1976-1978: 1480-1484); Roveda 2005: 90



図23 台座上に坐す男女と、馬と戦う男性（第3周壁内東側十字回廊中央祠堂東側前室東面出入口）



図24 ラーヴァナにおびえるシヴァとウマー（バンテアイ・スレイ）[2009年筆者撮影]



図25 『ラーマーヤナ』アヨーディヤーへの凱旋（プレア・カン）[2014年筆者撮影]



図26 ケーシンと戦うクリシュナ（バプーオン）[2013年筆者撮影]

ていない<sup>22)</sup>。今後、類例の比較検討を行うとともに、神話や叙事詩の内容を再検討し、この図像の主題を解明したい。

### 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像

第1周壁南塔門のペディメント（図27）、第3周壁内祠堂12のペディメント（図28）、および第5周壁西塔門のペディメントには、蛇行する大きな蛇の上に、中央に坐像が削り取られた痕跡が残る台座、その左右に四臂坐像や三面四臂坐像が合掌して坐す浮彫がみられた。このタ・プロームで見られる2例の他、プレア・カンやバンテアイ・クデイなど同時期の寺院でも同様の図像が確認されている<sup>23)</sup>。フランス極東学院がプレア・カンの整備作業中に撮影したペディメントの写真（図29）を見ると、中央の坐像は冠帯や胸飾を付け禅定印を結ぶ仏陀座像であることが分かる<sup>24)</sup>。手のひらの上には小さな薬壺が表されている。その右側には三面四臂坐像がひざまずき、

22) Hawixbrock 1989: 19, 1994: 23, 39; Roveda 1997: 151

23) Roveda 2005: 411

24) 現在、このペディメントは、前方に取り付く通路の屋根によって大部分が隠されている。図29は、フランス極東学院が1943年5月に撮影した写真であり、このペディメントの全体像が収められている（EFEO Archive



図27 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像（第1周壁南塔門北面出入口）



図28 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像（第3周壁祠堂12南側前室南面出入口）

合掌する姿で表されている。2つの手が執る持物は写真が不鮮明で判別しにくいですが、おそらく右手に執るのは数珠と考えられ、この坐像は四面四臂のブラフマーを表す可能性が考えられる。そして、左側の一面四臂坐像の2つの持物のうち、左手が執るのは法螺貝と考えられ、この坐像はヴィシュヌを表す可能性が考えられる。同様に、バンテアイ・クデイのペディメントの浮彫（図30）も、中央の坐像の右側に坐す三面四臂坐像の右手は数珠を執り、左側に坐す一面四臂坐像の左手の持物は一部破損しているものの、その輪郭から法螺貝であろうと判断できる。これら類例の図像表現と比較した結果、これらの浮彫は、仏陀坐像とブラフマー坐像およびヴィシュヌ坐像からなる三尊形式である可能性が考えられる。

また、タ・プロームでは他に、蛇行する蛇は表されていないものの、それぞれ台座上に坐す三尊像もみられた（図31）。中央の台座上の坐像は削り取られているが、その上部に菩提樹と傘があることから、当初は仏陀坐像が表されていたこと

が類推できる。その右側には、4つの手のうち1つに法螺貝を執り、もう1つの手に不明瞭だが何らかの持物を執るヴィシュヌ、左側には、三面四臂の坐像が表されている。この三面四臂の坐像は、四面四臂のブラフマーである可能性は考えられるが、2つの持物が破損して不明瞭であるため、断言することはできない。しかし、この図像も、蛇行する蛇の上に坐す三尊像同様に、仏陀像とヒンドゥー教の神像を併祀した三尊像である可能性が高いと考えられる。なお、同時期の建造であるブレア・カンでは、中央にカイラーサ山を背に坐すシヴァ、その右手にヴィシュヌ、左手にブラフマーが坐すヒンドゥー教の三神像が複数例確認されているが（図32）、タ・プロームではこうしたヒンドゥー教の三神像は確認できず、総じて、中央には仏陀像が表されたものが確認された。以上のような仏陀像とヒンドゥー教の神像を併祀した三尊形式が成立した理由や当時の宗教的背景については、今後、考察していくべき課題と考える。

No.14520)。また、フランス極東学院の月間報告書には、この三尊像について「3頭のナーガの上で、ヴィシュヌとブラフマーの間に坐すシヴァ（筆者訳）」と記している（Rapport's de la conservation d'Angkor 1943.5）。しかしながら、この中尊には、シヴァの特徴とされる乱れた頭髪や顎鬚、額の第三眼、片足を台座の下におろす坐り方（図32）はみられないため、シヴァとみなすことは難しい。



図29 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像  
(プレア・カン) [EFEO Archive No.14520]



図30 蛇行する蛇の胴体上に坐す三尊像  
(バンテアイ・クデイ) [2013年筆者撮影]

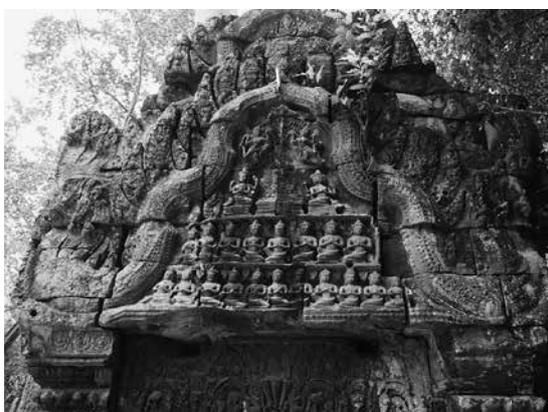


図31 三尊像(第3周壁北西隅祠堂西側前室西面出入口)



図32 ヒンドゥー教の三神像  
(プレア・カン) [2014年筆者撮影]

## 5. 今後の課題

以上、タ・プロームの調査で確認した浮彫のうち、主題の特定できたものを中心に紹介した。今後、資料整理を継続し、寺院伽藍全体の図像配置ならびに浮彫の様式的特徴について詳細に考察していきたい。同時に、寺域から発見された丸彫像の写真や寺域に残る台座の調査や、フランス極東学院による整備作業、およびインド考古調査局による修復時の記録の収集を行う。さらに、石柱碑文や出入口枠碑文といった碑文史料を精読し、出入口構成部材に表された図像表現やその配置構成と、碑文の記述内容との整合性を検証する。以上の課題に取り組むことによって、ジャヤヴァルマン7世のタ・プローム建造意図、ならびにこの寺院の尊像配置に表現した世界観を明らかにしたい。

### 【謝辞】

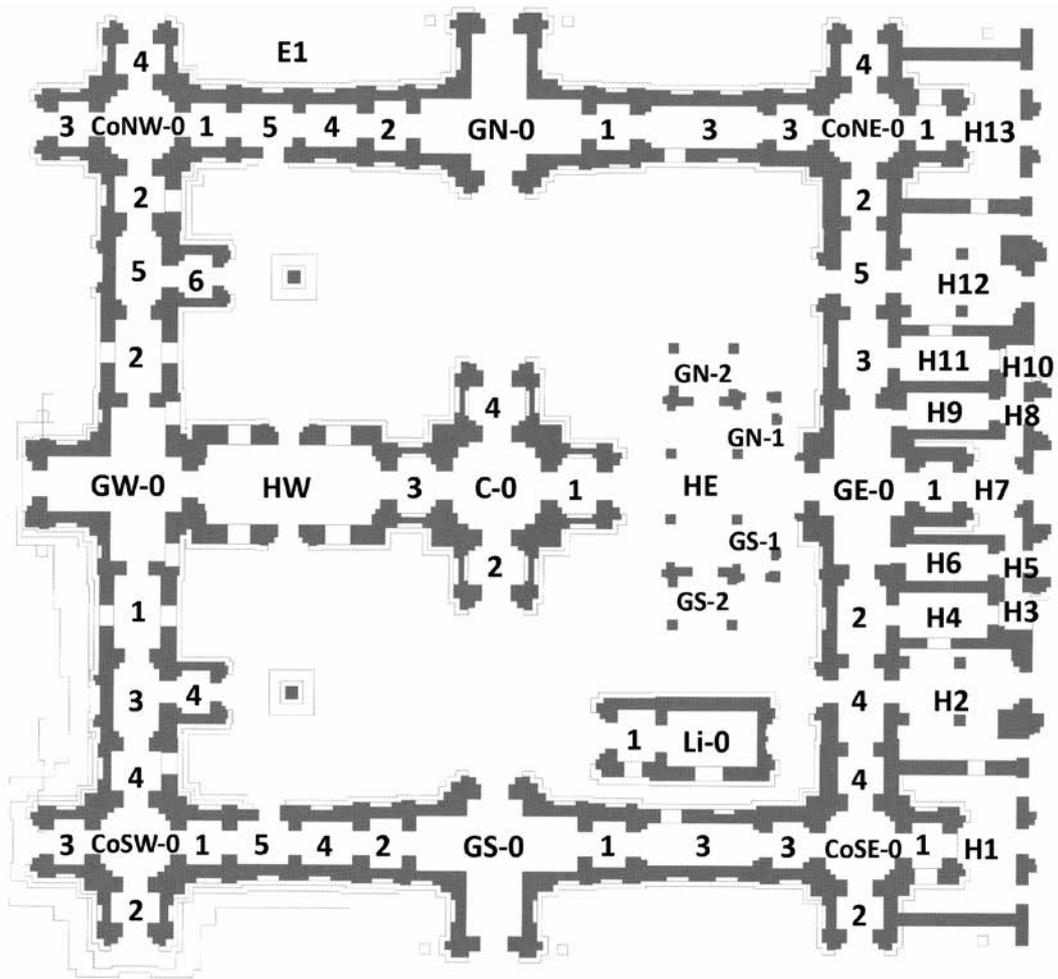
本研究は、JSPS 科研費 JP16J00303の助成を受けたものである。また本調査は、上智大学アンコール遺跡国際調査団(ソフィア・ミッション)の研究プロジェクトの一環として、カンボジア政府アプサラ機構(Authority for the Protection of the Site and the Management of Angkor Region、略称 APSARA National Authority)から調査許可を得て実施した。両機関には、調査を実施する

にあたり、さまざまな面でご協力いただいた。また、浮彫の図像の主題を特定するにあたって、肥塚隆先生からご助言を賜った。深く御礼申し上げます。

注：本稿の挿図のうち、とくに注記のないものはすべて今回の調査（Research on Image and Decoration at Ta Prohm 2016）で撮影したものである。

#### 【主要参考文献】

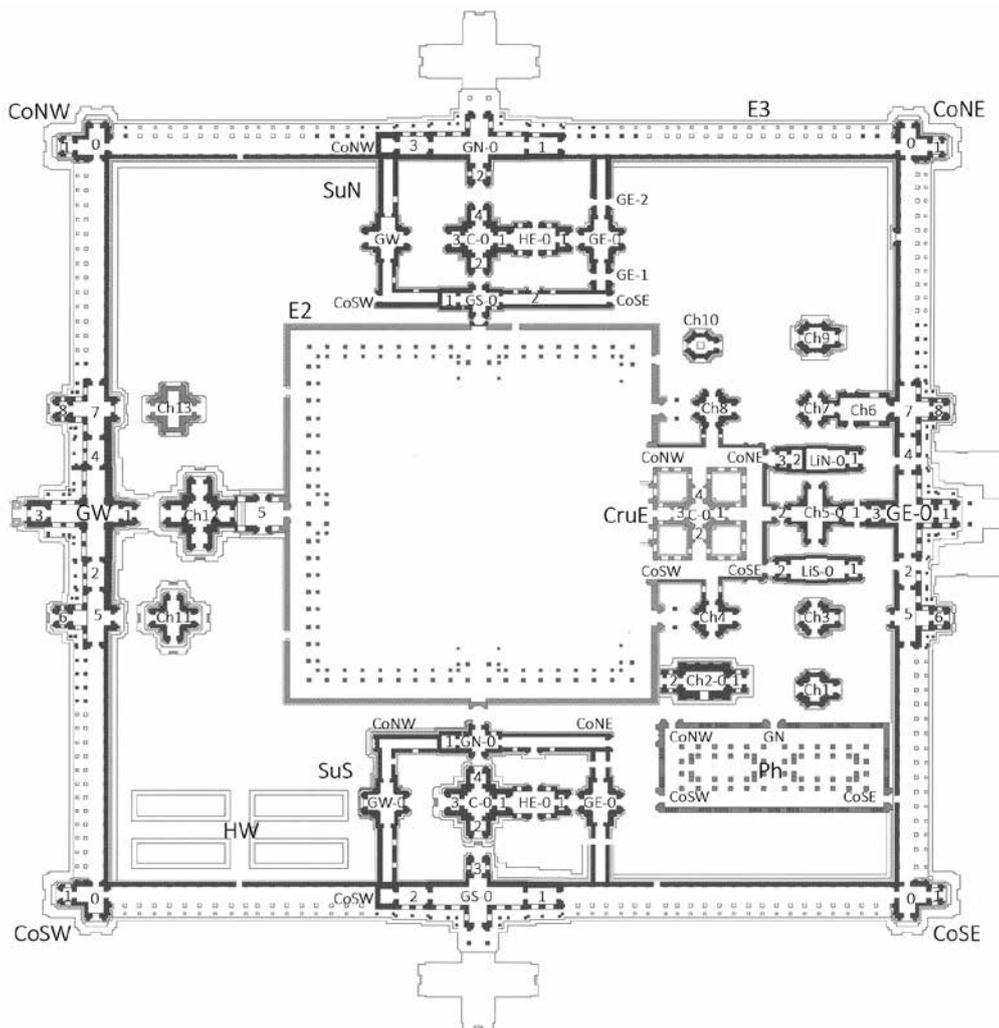
- Cœdès, George. 1906. “La stèle de Ta Prohm”, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 6, 44-86.
- . 1941. “La stèle du Preah Khan d'Angkor.” *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 41(2), 55-302.
- . 1951. “L'épigraphie des monuments de Jayavarman VII”, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 44(1), 97-120.
- Cunin, Olivier. 2004. *De Ta Prohm au Bayon, Analyse comparative de l'histoire architecturale des principaux monuments du style du Bayon*, Doctorat de l'Institut National Polytechnique de Lorraine, Nancy.
- . 2013. “A Study of wooden structures: Contribution to the architectural history of the Bayon Style Monuments”, In *Materializing Southeast Asia's Past: proceedings of the EurASEAA 12*, 2, edited by Marijke J. Klokke and Veronique Degroot, Singapore: NUS Press, 82-107. (The conference of the EurASEAA 12 was held in 2008 and this paper was originally presented in a conference at the School of Geosciences, Department of Archaeology, University of Sydney in 2006.).
- Ecole Française d'Extrême-Orient. “Ta Prohm”, “Preah Khan” *Rapports de la Conservation d'Angkor*.
- Foucaux, Philippe E. 1884. *Le lalita vistara : développement des jeux : contenant l'histoire du Bouddha Çakya-Mouni depuis sa naissance jusqu'à sa prédication*, *Annales du Musée Guimet*, t.6, Paris : E. Leroux (溝口史郎訳 1996 『ブッダの境涯』 東方出版).
- Foucher, Alfred. 1955. *Les vies antérieures du Bouddha, d'après les textes et les monuments de l'Inde*, Paris : Presses universitaires de France (杉本卓洲監修、門脇輝夫訳 1993 『仏陀の前生』 東方出版).
- Glaize, Maurice. 1944. *Les monuments du groupe d'Angkor* [4e éd. revue et mise à jour, 1993], Paris, Adrian-Maisonneuve.
- Hawixbrock, Christine. 1989. *L'iconographie du Prah Khan d'Angkor*. Paris : Mémoire dactylographié de DEA, Université de Paris III (Unpublished).
- . 1994 *Population divine dans les temples, religion et politique sous Jayavarman VII* (2 vol.), Paris : Thèse dactylographiée de l'Université de Paris III sous la direction de M. le Professeur Bruno Dagens (Unpublished).
- Kapur, Pradeep K. and Sachidanand Sahai. 2007. *Ta Prohm: A Glorious Era in Angkor Civilization*, Bangkok, White Lotus Press.
- Maxwell, Thomas S. 2007. “The Short Inscriptions of the Bayon and Contemporary Temples.” In *Bayon: New Perspectives*, edited by Joice Clark, 122-135. Bangkok, River Books.
- Roveda, Vittorio. 1997. *Khmer Mythology : Secrets of Angkor*, London, Thames and Hudson.
- . 2005. *Images of the Gods: Khmer Mythology in Cambodia, Laos & Thailand*, Bangkok, River Books.
- Shastri, Hari P. (tr.). 1976. *The Ramayana of Valmiki*, vol.2, 3rd ed, Brussels : Jos. Adam, (Reprint. Originally published: London : Shanti Sadan, 1957).
- Tagare, Ganesh V. (tr.). 1976-1978. *The Bhāgavata-purāna*, Delhi : Motilal Banarsidass.
- 久保真紀子 . 2012. 「アンコールのプレア・カンにおける図像表現とその配置構成：出入口に施された装飾を中心に」2012年度上智大学学位請求論文 .
- . 2014. 「アンコールのプレア・カン寺院における尊像配置とその意味：出入口の浮彫図像と碑文の比較を通して」『佛教藝術』 337: 56-83.



注：(Kapur and Sahai 2007: 197)をもとに筆者加筆

施設コード	施設名
E1	第1周壁
C	中央主祠堂
HE	東側広間
HW	西側広間
Li	経蔵
GE	東塔門
GS	南塔門
GW	西塔門
GN	北塔門
CoSE	南東隅祠堂
CoSW	南西隅祠堂
CoNW	北西隅祠堂
CoNE	北東隅祠堂
H	広間

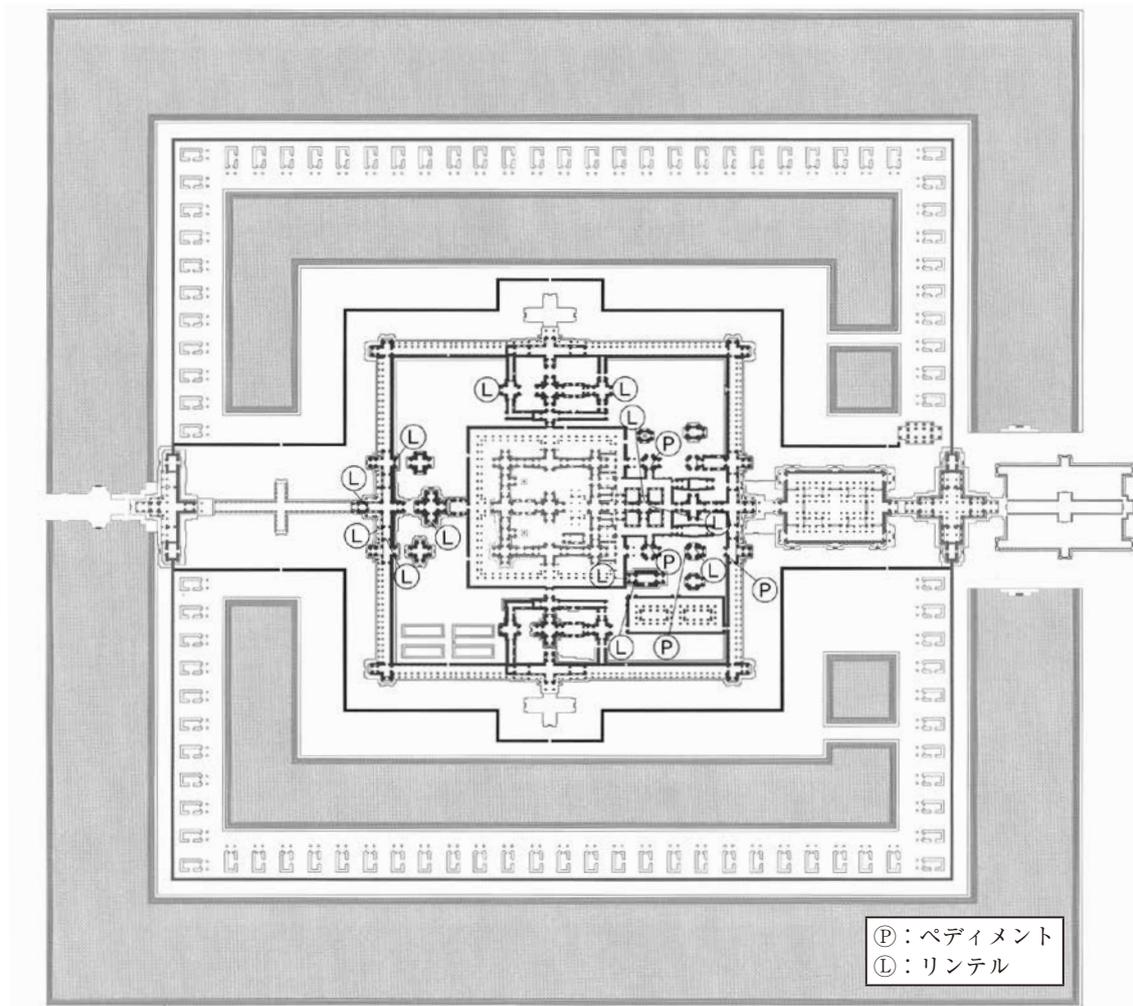
付図1 タ・ブローム施設コード（加藍中央部）



注：(Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

施設コード	施設名
E2	第2周壁
E3	第3周壁
GE	東塔門
GS	南塔門
GW	西塔門
GN	北塔門
CoSE	南東隅祠堂
CoSW	南西隅祠堂
CoNW	北西隅祠堂
CoNE	北東隅祠堂
CruE	東側十字回廊
SuS	南側副次の伽藍
SuN	北側副次の伽藍
C	中央主祠堂
HE	東側広間
Ch	祠堂
Li	経蔵
Ph	列柱広間

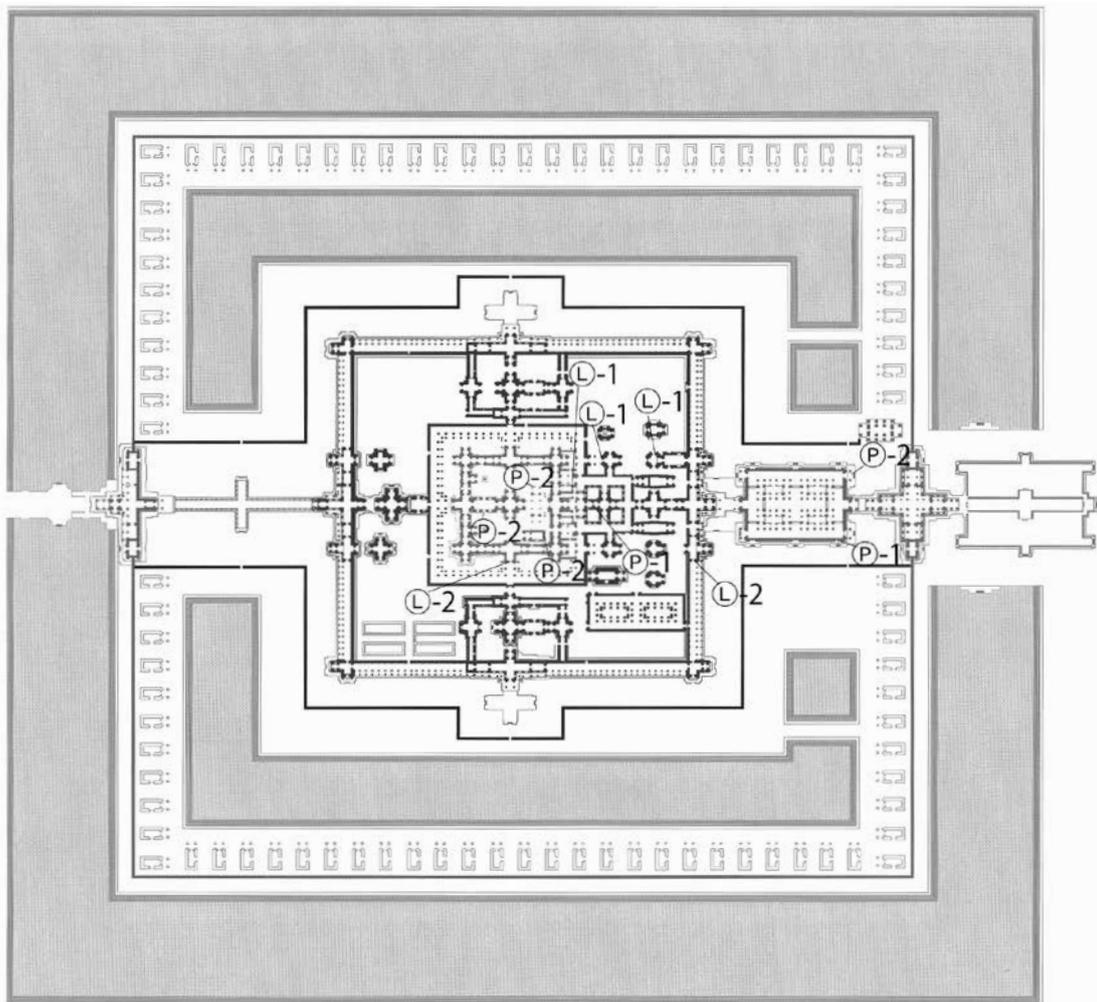
付図2 タ・プローム施設コード（第2周壁～第3周壁）



注：(Kapur and Sahai 2007: 178)をもとに筆者加筆

禪定印仏坐像が判別できる程度残存しているもの	ペディメント	E3-Ch3-W, E3-Ch4-N, E3-Ch8-S, E3-GE-5-W
	リントル	E3-Ch2-0-W, E3-Ch2-2-W, E3-Ch3-N, E3-Ch12-0-S, E3-GW-0-S, E3-GW-2-S, E3-GW-7-E, E3-CruE-C-0-E, E3-CruE-C-0-N, E3-SuN-GE-0-E, E3-SuN-GW-0-W
削り取られた痕跡から禪定印仏坐像と判断できるもの、および周囲の菩提樹や傘等から禪定印仏坐像が表されていたと判断できるもの	ペディメント	E3-Ch11-N, E3-LiS-2-W, E3-GE-6-E, E3-CoSE-0-S, E3-CoNW-0-N, E3-CoNW-1-W, E3-CruE-C-S, E3-SuN-C-2-S, E3-SuN-GE-0-E, E3-SuN-GS-0-N, E3-SuN-GW-0-W
	リントル	E1-CoNW-0-W, E1-CoNW-0-N, E2-H4-E, E2-H9-E, E3-Ch3-W, E3-Ch4-E, E3-Ch5-0-W, E3-Ch8-S, E3-GE-5-E, E3-GE-7-W, E3-CoSE-0-W, E3-CoNW-0-E, E3-CoNW-0-S, E3-CoNW-0-N, E3-CruE-C-0-S, E3-SuN-C-0-W, E3-CruE-GE-1-N, E3-SuN-C-0-S, E3-SuN-GW-0-E, E3-SuN-GE-0-W, E3-SuN-GN-0-W, E5-Ph-CoNE-N, E5-Ph-CoNW-N
リングに改変されたもの	ペディメント	E1-GW-4-E, E3-Ch12-5-S

付図3 禪定印仏坐像の配置場所（第5周壁内）と出入口コード一覧

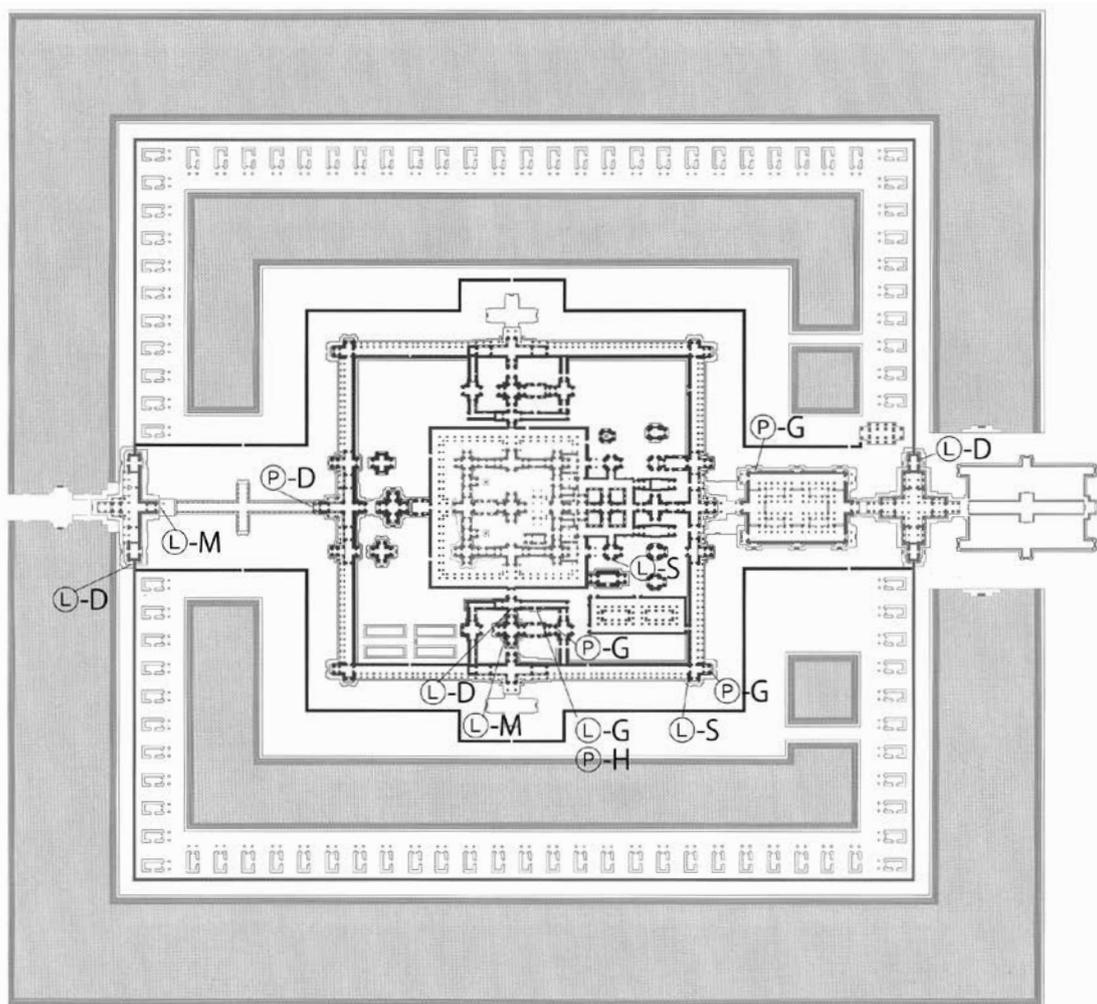


注: (Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

- Ⓟ-1: 観音菩薩の浮彫されたペディメント  
 Ⓛ-1: 観音菩薩の浮彫されたリントル  
 Ⓟ-2: 般若波羅蜜多菩薩の浮彫されたペディメント  
 Ⓛ-2: 般若波羅蜜多菩薩の浮彫されたリントル

観音菩薩	ペディメント	E3-CruE-C-3-W、E5-Ph-CoSE-S、E6-DA-S、E6-DA-N
	リントル	E2-H11-E、E3-Ch7-N、E3-Ch8-W
般若波羅蜜多菩薩	ペディメント	E1-HW-GN-2-N、E1-LiS-0-E、E5-Ph-CoNE-Po-E、E6-GE-4-S、E6-GS-0-N
	リントル	E1-GS-0-S、E3-GE-5-S

付図4 観音菩薩像と般若波羅蜜多菩薩像の配置場所（第5周壁内）と出入口コード一覧

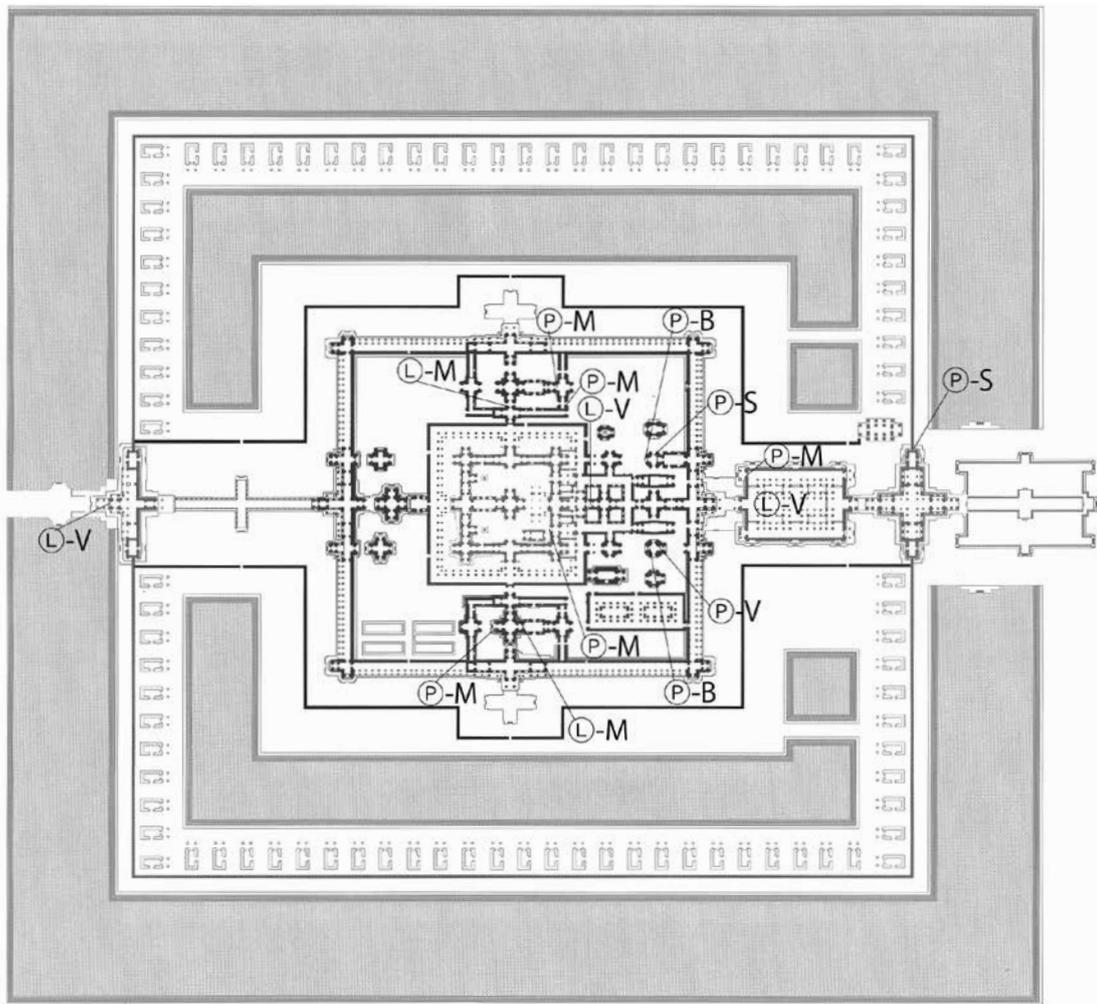


注: (Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

- Ⓟ-G : 出家踰城が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-G : 出家踰城が浮彫されたリントル
- Ⓟ-H : 剃髪が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-H : 剃髪が浮彫されたリントル
- Ⓟ-S : 乳粥供養が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-S : 乳粥供養が浮彫されたリントル
- Ⓟ-D : 降魔成道が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-D : 降魔成道が浮彫されたリントル
- Ⓟ-M : ムチリンダ竜王の護仏が浮彫されたペディメント
- Ⓛ-M : ムチリンダ竜王の護仏が浮彫されたリントル

出家踰城	ペディメント	E3-CoSE-1-E、E3-SuS-GE-0-W、E5-Ph-CoNW-N
	リントル	E3-SuS-GN-2-S
剃髪	ペディメント	E3-SuS-GN-2-S
	リントル	E3-SuS-GN-2-S
乳粥供養	ペディメント	
	リントル	E3-Ch4-S、E3-CoSE-0-W
降魔成道	ペディメント	E3-GW-3-W
	リントル	E3-SuS-GN-0-S、E5-GE-6-E、E5-GW-5-S
ムチリンダ竜王の護仏	ペディメント	
	リントル	E3-SuS-C-0-W、E5-GW-1-E

付図5 仏伝図の配置場所（第5周壁内）と出入口コード一覧



注：(Kapur and Sahai 2007: 174)をもとに筆者加筆

- Ⓟ-V：ヴェッサンタラ・ジャータカが浮彫されたベディメント
- Ⓛ-V：ヴェッサンタラ・ジャータカが浮彫されたリントル
- Ⓟ-S：シヴィ・ジャータカが浮彫されたベディメント
- Ⓛ-S：シヴィ・ジャータカが浮彫されたリントル
- Ⓟ-M：ムーガパッカ・ジャータカが浮彫されたベディメント
- Ⓛ-M：ムーガパッカ・ジャータカが浮彫されたリントル
- Ⓟ-B：プーリダッタ・ジャータカが浮彫されたベディメント
- Ⓛ-B：プーリダッタ・ジャータカが浮彫されたリントル

ヴェッサンタラ・ジャータカ	ベディメント	E3-Ch3-N
	リントル	E5-GE-3-W (崩落)、 E5-GW-3-W、E3-CruE-C-3-W
シヴィ・ジャータカ	ベディメント	E3-Ch7-N、E5-GE-6-N
	リントル	
ムーガパッカ・ジャータカ	ベディメント	E1-GE-4-W、E3-SuS-C-3-W、E3-SuS-GW-0-W、 E3-SuN-GE-0-W、E3-SuN-GE-1-E、 E5-Ph-CoNW-W (壁面に浮彫された疑似的な ベディメント)
	リントル	E3-SuS-GN-0-S、E3-SuN-GS-N
プーリダッタ・ジャータカ	ベディメント	E3-Ch7-W
	リントル	E3-Ch3-W

付図6 ジャータカ図の配置場所(第5周壁内)と出入口コード一覧